

<書評論文>

概念としての「自己」

——自己の社会性の考察に関する2つの視点——

Ulric Neisser and David Jopling (eds.),

The Conceptual Self in Context : Culture, Experience, Self-Understanding.

(Cambridge University Press, 1997)

熊田 知子

はじめに

「自己」とは何か。我々の素朴な実感から、「自己」は往々にして社会と無関係な「静的で一貫した実体」と思われがちである。そのような実体としての「私」がまず先にあって、それが他者たちと関係を取り結ぶのである、と。だが、近年「自己」についてそのような感覚を超えた議論が蓄積されつつある。ここに紹介する『コンテキストにおける概念的自己』は、アメリカ、エモリー大学で催されたシンポジウムに基づいて、U. ナイサーを編者に、13本の論文から構成された論文集である。著者らの専攻分野も心理学、人類学、哲学等様々であり、議論は多岐にわたっている。とはいえ、本書に収められた論文には共通する前提がある。それは本書の題名の示すように、「自己は実体ではなく、概念として捉えられるべきであり、社会との関わりの中で形成される」というものである。本書はこの前提をもとに、自己の社会性の究明を目指しており、自己をめぐる社会学的考察と重なる興味深い知見がもたらされている。

ただし、「私」が社会との関わりの中で存在しているという問題設定には二つの位相が含まれており、本書ではこれらが未整理のまま混在しているように思われる。一つは、「私とは何か」が社会的相互作用の中から生まれてくる、というものである。もう一つは、「私とは何か」と問い、応えるような現象自体が、社会の持つ条件や構造に依っている、というものである。本書全体の焦点は前者に向けられており、この論文においても前者からの考察を本書の全体的な流れとしてまず、以下で紹介する。だが、後者もまた現代社会の

「私」の重要な位相であり、本書所収の論文にはこの点に注意を払っているものもある。本稿では特にこれらに光を当てることで、自己の社会性をめぐるもう一つの問題を考察しよう。そして最後に両者の総合の必要性を指摘したい。

1 社会的相互作用の中の「私」

1-1 概念的な自己

「私」が社会的関係の中から生まれてくることを、本書は「自己」を「概念」として捉えることで示している。巻頭のナイサーの論文 (Neisser, 'Concepts and Self-concepts') では「概念的自己」を以下のように定義している。概念的自己とは「我々が自分自身について考える時に、各自の心にもたらされるものである」。自己を概念として捉えることは、概念の以下のような性質からして、ある種の円環構造を間接的に示すことであるように思われる。ナイサーは続けて言う。「私の自己概念は、ある程度私の具体的経験から形成されてきた…が、逆もまた重要だ。私が理念的な自己概念に従って行動すれば、私の真の自己は概念的な自己によって形成されたことになる」。「自己」は、現実の他者や物事を具体的に経験することに先立って完成した形があるのでもなく、その後で完成される訳でもない。具体的な経験の中から自己概念が生まれ、それを基に具体的経験を重ねる。さらに言えば、そのような経験によって自己概念は変容し豊かになっていく。自己はそれ自体境目のない円環の一方の極であり、自己を概念として捉えることはその円環を間接的に示すことになる。ナイサーの次の章でH. マーカスらが触れるように、本書の「自己」の捉え方は、C. クーリー、G. H. ミードに端を発する自己の社会学と多くを共有している (Markus, Mullally and Kitayama, 'Selfways: Diversity in modes of cultural participation')。クーリーは、自己が、鏡としての他者を通じて知られるものであることを指摘した。ミードもまた、自己が社会的経験と社会的活動の過程において他者との関係の結果として生じてくることを示している。さらにミードは他者の役割期待から構成される自我の側面だけでなく、それを修正・変更して他者に働きかけていく側面も描いている。自己は社会的体験の中で生まれ、新たな社会的体験を生む。自己はそうして変容していく動的な過程なのである。

1-2 自己概念の多様性

自己概念は具体的経験との円環であるから、その経験の諸相においてさまざまな形態をとる。もちろん、経験のパターンの違いは、地域的な違いによるものも大きい。本書の前半は、さまざまな地域での実際の調査に基づいた論文が集められ、文化間比較となっている。が、著者達は、ひとまず「文化」という言葉を使いながら空間による分類だけでなく、もう少し複雑な議論をしている。端的に言えば、彼らは人々にとって生きられる現実を描こうとしているのだ。例えば、マーカスらは、日本、中・韓、アフリカ等の地域で文化が異なり、自己を形成する具体的な経験の仕方も多様であることを示す。けれども、それらの中でもジェンダーによる違いがあるはずである。ジェンダー以外にも「教育程度、年齢、性的志向」等などのさまざまなカテゴリーがあり固有の経験のパターンがある。彼らは、私達はそれらの諸カテゴリーの重なりを生きているのであって「決して別々に経験しているのではない」ことも指摘する。また、F. バルトは、E. ゴフマンを参考にしながら、別の意味でも文化は多元性を持つことを主張する。「自己概念は当該の文化によって、根底から異なっている」けれど、同じ文化の中でも言葉だけでなく具体的な象徴物、法律、儀礼的表現によって異なって動員される「複数のモデルが使われている」(Barth, 'How is the self conceptualized? : Variations among cultures')。経験のパターンの集積である文化は一元的なものではない。本書での文化間比較では、何を基準に分け、どこに焦点を当てるかは異なるものの、多元性を持つことが描かれている。どれが本当か、というのではなく、そのような多元性を持って人々の生活は営まれているのである。

それはそのまま自己の多元性にも繋がる。最終章では、自己概念の多様性を包括的に説明するモデルとして、「多層的な自己」モデルを呈示している(Jopling, 'A "Self of selves" (?)')。我々の自己は、生物学的な資源を基底に、複数の層が重なった存在である。ある程度各層を統一する輪郭は存在する。しかし諸層は、それぞれの次元において、各々が絶えず変化している。したがってその統一性の方も、その程度も含めて変化していく。各層で私達はさまざまな困難を抱えているが、その都度私達は、各層のバランスを取りながら解決を与えている。本書の最終章では、このような「自己」モデルが呈示されている。

2 社会現象としての「私」

本書は、全体として自己概念が社会的経験から成り立つことについて論じている。これは、自己概念のいわば中身について焦点を当てているといえよう。どのような社会にあっても、共通する自己の社会性である。ただし、何か実体としての「自己」がある訳でないことを明らかにするためにはもう一つの位相も重要である。それは「私」という概念それ

自体にこだわりがあるかどうか、社会的条件に依っているという側面である。私達は当たり前のように「私」について思考をめぐらすけれども、「私」とは何かが問われ、一人一人が「私」を見つめるような社会と、そうでない社会とがある。概念の中身だけでなく、概念それ自体も、社会の知的関心の対象として構成される社会的現象である。この位相においても「自己」は社会的なのである。

2-1 近代化と自己

本書の中では3つの論文がこの位相に触れている。特に明白なのは、西欧近代初期の社会現象として自己概念を捉えたL. サスの論文であろう (Sass, 'The conscious machine: Self and subjectivity in schizophrenia and modern culture')。彼は精神分裂病を近代社会に特有の病であるとして、その背景にある近代社会の自己概念の特徴を、直接にはM. フーコーに依拠しつつ論じている。分裂病の妄想には二面性がある。分裂病者は、全世界は私に従属しているという誇大妄想(世界の天候は私の機嫌次第だ、等)を持つ一方で、その私であり全世界であるものは、誰かに操られている(私の中に光線が入ってくる、等)、という妄想を抱く。矛盾した奇妙な妄想に聞こえるけれども、この二面性は近代社会の自己概念の極端な姿とも言える。

フーコーが明らかにしたように、近代的主体は、近代の権力関係が具現化されたさまざまな社会的装置の中で生み出された。そこでは人は、自分を監視する視線を内面化し、自ら自分を主体化させる。人が近代的主体たりうるのは主観を客体化=客観化する営みにおいてである。また、別の文脈でいえばカント流の哲学にも同様な主観と客観の二面性を見出せる。カントは、経験的な世界を構成する際に果たす、人間の主観の能動的で決定的な役割を強調した。そこに向かって世界の全てが投影される神のような位置を、人間の主観は与えられる。ただし、まさにその故に、カント主義は人間の主観を、学的研究の第一の客体として確保してきたのである。人間科学はそうして生まれ、その発展はそのような見方をますます強化してきた。サスはこのような現象を指して「主観の客体化」と呼ぶ。

この現象の具体的な社会経済的要因には、近代社会の官僚制化や技術化、世俗化、合理化等が考えられよう。P. L. バーガーは、近代社会では合理的な計画や反省を要求されるため、人々が、公的な場面での仮面と個人の私的な意識が切り離されているように感じていることを論じている。また、A. ギデンズは、近代では社会的制度や行為が、伝統に埋め込まれていた静態的な状態から離れ、ダイナミックに根本的に変化し続けるため、自己もまた絶えず意識的に行われる反省過程そのものによって、成り立つようになることを

指摘している。サスはこれらの議論に触れながら、主観の客体化が近代社会に特有なものであることを示す。

先に述べた分裂病の妄想の二面性は、主観の客体化の二面性を極端なまでに文字どおり生きてしまうことで生じる。主観の客体化は自分の主観だけを見つめてしまいがちになり、分裂病者は同じ条件を共有する社会においてさえ孤立してしまう。けれども、主観の客体化という現象は、近代社会を生きる全ての人々に共有されている。我々は「私とは何か」を問う社会の中に生きているが、それは近代社会に特有の現象なのである。

2-2 自己の「セオリー」

自己概念それ自体が社会的な問題となる現象を、現代社会の心理学的考察から触れているのが以下の二論文である。

D. ハートらは、まず自己概念を抽象度に依じて3つに分けた(Hart and Fegley, 'Children's self-awareness and self-understanding in cultural context')。それらとは、個人の具体的な記憶、自分自身について考える際のやや抽象的な枠組や表現(肉体的特徴や癖や能力など)、そして最も抽象度の高い「セオリー」の3つである。ここで言う「セオリー」とは「自己の本質やその世界との関係についての一連の仮定」と定義される。このような「セオリー」は、個人的記憶や表現の分類に意味や重要性を与え、それぞれの連関をかたちづくる。彼らは、被験者に「あなたはどんな人ですか?」「それは何を意味しているの?」と尋ねて、彼らの自分についての「セオリー」を引きだそうとした。もっとも、「セオリー」を持つ、といっても大仰なものではない。ニュージャージーのアフリカ系アメリカ人の青年が、「君は人に悪影響を与えないようにしていると言うけど、どうして?」と尋ねられて、「だって今の社会は犯罪や薬にまみれているだろう?。もしそれで儲けたりなんかしたら、子供が真似をするじゃないか。だから悪影響を与えないようするのが大事なのさ。悪い影響はいつも遠くまで伝わるからね。」とスラスラ返答できる、という程度のものだ。ちょっとした人生哲学、生き方論と言った方が語感に近いかもしれない。ところが、アイスランドでは「君は自分のことをどう言う(describe)かい?」と尋ねても明確な答えは得られない。もちろん、アイスランドの子供でも自分の能力の評価はするし、不道德でも社会的不適応でもない。ただ、上記のような「セオリー」を意識して明確に述べる、ということがないのである。逆に言えば、客観的な自己記述は人間の発達や適応に必ずしも付随するものではない。ハートらはそれを当該社会の文化的異質性に影響されると結論づけている。ニュージャージーでは文化的な異質性と葛藤が激しいが、アイスランド

ではその程度が低い。つまり、文化の異質性が高ければ高いほど、「自分たち自身の観点（パースペクティブ）を説明するよう求められる」ため、自分自身の「セオリー」を洗練させている、ということをごここから導出することができる。

J. F. キルストロームらも異なる観点から、「セオリー」について考察することの必要性を述べている（Kihlstrom, Marchese-Foster and Klein, 'Situating the self in interpersonal space'）。彼らは一人の被験者をインテンシブに調査することで、自己が実体でないことを明らかにした。彼らは、一人の被験者に知人を何人か挙げさせ、そのそれぞれという場面をどのように捉えているか記述させた。例えば「夫といると落ち着く」「某さんといても孤独な気がする」等である。このようにして百近くの記述を得たが、それらは状況に応じて異なった複数のまとまりを持っていた。まとまりは複数であることから、全ての状況を超えて一貫した自己がある、という考えは否定される。ただし、自己概念は全くばらばらなのではなく、何らかの類似性に基づいてまとまりを有している。彼らは自己概念には「セオリーに駆動される（theory-driven）」側面もあることも指摘する。一般的に、私達が何らかの概念を持つとき、具体例の情報以外にも、各々の具体例の関係をしめす知識も持つ。それらによって具体的なものに関係を持たせている。例えば、「部屋」という概念には、「窓」や「壁」という具体的な物についてだけでなく、それらの関係についての知識も同時に含まれている。彼らはそのような知識を「セオリー」とよび、今のアメリカ社会では、そのような知識が大衆的な文化、特に大衆心理学から直截に得られることを指摘し、自己に関する研究の今後の課題に挙げている。

これら3論文に共通する論点は、社会が自己という概念そのものの成立に深く関わっているということである。自分自身を見つめる感覚や、そのための知識が人々の日常生活に入り込んでいる社会。そこには特有の自己概念の姿がある。自己が実体ではない、とはこのような位相においても考察することができる。このような位相は、相互作用に文化的な違いがあるからという観点とはやや異なる。従って本書全体でのこの3論文の扱いは少々冷淡である。ナイサーはサスを「あまり伝統的な考えではない」とする。ハート、キルストロームらに対し、R. フィーブシュらは、そのような「セオリー」というものは、被験者が「インタビューという特殊な状況」にあって、「頭の中」でこしらえたものに過ぎず、考察することにあまり意味の無いこととする（Fivush and Buckner, 'The self as socially constructed: A commentary'）。けれども、今まで述べてきたような位相においても、「自己概念」は社会的なのである。

おわりに

ではこの自己の社会性を問う2つの位相は無関係なのだろうか。近代化は、私達の生活に未だ大きな影響を与えている。異なる地域の間での文化間接触だけでなく、ジェンダー等、今まで問題とされてこなかった差異が明白になりつつあるという点でも文化的異質性は増大している。心理学、精神医学等の大衆化も看過できない。「私」への社会のこだわりは増しこそすれ減じることがない。そして、もう一度ナイサーの概念的自己の定義を思い起こすとき、この概念そのものの姿が相互作用という循環に何の影響も及ぼさないとは考えられない。また、概念自体だけでは空き箱のようなものなのであって、一人一人の「私」の具体的な内実、その人の組み込まれる相互作用によって満たされることは忘れてはならない。一方で「私」へのこだわりを増す社会的文脈の中で、一方で「私」に具体的な内実を与える多元で多様な相互作用の文脈の中で、両者の重なる内に私達は他ならぬこの「私」を紡いでいる。「自己」の社会学的考察は、この二つの位相からなされて行くべきである。

本書は「概念的自己」という標題で、二つの位相に関わる論文を共に収めることに成功している。本書の言うように、自己概念の内容は具体的な経験との円環であり、それに諸相があることから多層的なものである。これらの層が各々での困難に一定の解決を与えながら、円環の中で変容していき、自己もずれや矛盾をはらみつつ変容していく。「私」は多層で多様な経験を積み重ねて変わっていく。今この時にも私の内にはさまざまな文脈があり、また未来へ向けて可能性としてさまざまな姿がある。本書のように自己を捉えたなら、次のようなことが言えよう。つまり、「他者」は「私」だったかもしれず、「私」は「他者」になるかもしれない、このような意味で「私」と「他者」は共存する、と。これは私達がある程度常識として持ち、それが「私」達を他者へ開き、「他者への想像力」という言葉に単なる掛け声以上の効力を曲がりなりにも持たせている。そして、「私」にこだわる社会的文脈の中で、このように他者との関わりを含んだ観点が呈示される意義は大きい。ただ、本書では、そのメッセージの意義を位置づける定点とも言うべき社会的文脈という位相において、十分な考察がなされていない。二つの位相を含みこんだ「自己」の社会性の探求、それが自己の社会学的考察に課せられた問いであると言えよう。

(くまた ともこ・修士課程)